巻頭言　失敗は隠さず恐れずチャレンジを

失敗の多くは予測でき、対策を講じる事ができる。新しい学問分野として提唱されている「失敗学」の考え方である。人は同じ様な失敗を繰り返すからだ。機械工学の実験で同じ様な失敗をする学生が多い事に注目し、発生メカニズムを研究したのが始まりだという。実験は間違ったらやり直せば良いというものばかりではなく、装置が爆発する事もある。それでも事前の注意を守らず失敗する学生が多いのは、言葉だけでは実験中に何が起こり得るか、どの様に危険なのかを具体的に想像できないからだという。

東日本大震災の大津波を「想定外」とした弁解が批判を浴びた。震災後に脚光を浴び再版された「三陸海岸大津波」を著した吉村昭（1927～2006年）は、「想定外などと言うのは不勉強か怠慢である」という厳しい言葉を残した。天災は人知の及ばないもので、予測不可能な事があるのは確かだが、過去に起きた事はこれからも起こり得る。避難訓練を徹底的に繰り返していたため殆ど犠牲者を出さなかった小学校があった一方、過去の被害に関する知識と避難訓練が不十分で多数の犠牲者を出した小学校もあったという。残念乍ら後者は人災という名の社会的な失敗である。

自然災害でも人間の失敗でも、それがどの様に起き、どの様に回避したり被害を軽減したりできるのかを知り、対応方法を訓練しておく事が大切である。消防避難訓練、飛行機の失速回復訓練、柔道の受身、スキーの転び方等が典型的な例であろう。火事を出すな、失速するな、相手の技にかかるな、転ばない様に気をつけろ、等々、幾ら口を酸っぱくして注意しても実際にはそうした事態の発生は避けられないからである。

しかし、失敗は隠蔽されがちである。個人の場合は恥ずかしいから、組織の場合は責任追及を恐れるからであろうか。また、最悪の状況を予測する事を嫌がる風潮もある。不吉な言葉を口にするとそれが本当になるので縁起が悪い、という言霊信仰からなのか。予算不足で対策がとれなかった場合でも、そうした事態を予測し乍ら無為無策だったと責任を追及されるからなのか。同じ様な失敗の再発を避けるには、失敗経験をオープンにして皆で共有する必要がある。知らなければ対策は不可能なのだ。

「人生万事、塞翁が馬」という故事がある。良馬を入手したら息子が落馬し、大怪我をしてしまったが、その障害で兵役が免除になり、村の若者全員が戦死した激戦を免れた。その良馬が逃げてしまったが、やがて沢山の馬を連れて帰ってきた、という国境の村のお爺さんの話である。「禍福は糾える縄の如し」や「災いを転じて福となす」いう言葉もある。ペニシリンや高分子蛋白質の質量分析器の様に、実験の失敗によって発見された未知の現象がノーベル賞に繋がった例もある。転んでもタダでは起きず、失敗してもそこから何かを得る様にしたいものである。

失敗はしないに越した事はない。注意する事も失敗が起き難い環境を整える事も大切だが、失敗を恐れては進歩も発展もない。多少の失敗は覚悟の上で試してみないと判らない事は少なくない。失敗は隠さず恐れず、皆で知恵を出し合って新しい事に積極的かつ創造的にチャレンジできる組織文化を醸成したいものである。